

令和6年2月22日

太田市議会議長 矢部 伸幸 様

広域連携調査特別委員会 大川 陽一

広域連携調査特別委員会視察報告書

- 1 期 日 令和5年11月1日（水）から
11月2日（木）までの2日間
- 2 視 察 地 石川県金沢市、富山県富山市
- 3 視察事項 (1)石川県金沢市議会
石川中央都市圏（金沢市ほか3市2町）における広域連携
について
(2)富山県富山市議会
富山広域連携中枢都市圏（富山市ほか1市2町1村）に
おける広域連携について
- 4 派遣委員 8名
委員長 大川 陽一 副委員長 青木 雅浩
委 員 高野 博善、木村 浩明、松川 翼、星野 一広
渡辺 謙一郎、大川 敬道
- 5 執 行 者 企画部企画政策課 参事 矢羽 賢一、課長補佐 川田 智
- 6 随 行 者 議会総務課 係長代理 石塚 克也
- 7 視察概要 別添のとおり

(1) 石川県金沢市議会 視察概要

金沢市の概要 (令和5年4月1日現在)

- ・面積 約 468.81 k m² ・人口 445,688 人 ・世帯数 212,096 世帯
- ・市制施行 明治22年4月1日
- ・一般会計予算額 (当初) 令和4年度: 1,806 億 1,000 万円
令和5年度: 1,819 億 5,000 万円
- ・議員定数 38 人
- ・政務活動費 (議員一人当たりの月額) 160,000 円

視察事項

「石川中央都市圏 (金沢市ほか3市2町) における広域連携について」

・目的

全国的に本格的な少子高齢社会を迎えている。人口減少とこれに伴う高齢化は経済規模の縮小や生活水準の低下を招き、地域経済社会の持続性を危うくする。本市においても例外でなく、本市だけでなく近隣自治体等との連携を視野に持続可能なまちづくりを推進していく必要がある。金沢市が中心となり各種連携施策を推進する石川中央都市圏での取り組み、特に金沢広域急病センターについての事例を視察し、広域的な圏域での各種施策について調査し、参考にするため

・所感

石川中央都市圏の取り組みは当初、国からの働きかけもあり始まったとのことである。金沢市のような中核になる市が上手くリーダーシップを取り、比較的規模が小さい市町に呼びかける形で、金沢広域急病センターの開設やセミナーの開催等、広く様々な事業を実施しており、本市にとって今後の参考になるものである。

金沢広域急病センターは広域連携の医療の取り組みであったが、本市においても、少子化に伴う小児科、産婦人科の減少や経営難等の対策について、広域で何かできるものがあるのではないかとヒントを得ることができた。さらに、周産期や小児科の医師不足の問題について、東毛地区の太田館林医療圏の充実を図っていくためにも、広域連携を検討していく必要があるのではないかと感じた。

また、石川中央都市圏はそれぞれの地域において、メリットが機能している部分が印象的であり、文化やスポーツの交流も非常に盛んであることを実感した。本市では上州太田スバルマラソンを開催しているため、ハード面での広域連携だけではなく、ソフト面でも少しずつ連携できる可

能性があると感じており、今後の本市の施策の参考になるものであった。

(2) 富山県富山市議会 視察概要

富山市の概要 (令和5年3月末現在)

- ・面積 1,241.70 k m² ・人口 407,542 人 ・世帯数 184,071 世帯
- ・市制施行 明治22年4月1日
- ・一般会計予算額 (当初) 令和4年度: 1,678 億 9,826 万円
令和5年度: 1,672 億 5,140 万円
- ・議員定数 38 人
- ・政務活動費 (議員一人当たりの月額) 150,000 円

視察事項

「富山広域連携中枢都市圏 (富山市ほか1市2町1村) における広域連携について」

・目的

全国的に本格的な少子高齢社会を迎えている。人口減少とこれに伴う高齢化は経済規模の縮小や生活水準の低下を招き、地域経済社会の持続性を危うくする。本市においても例外でなく、本市だけでなく近隣自治体等との連携を視野に持続可能なまちづくりを推進していく必要がある。富山市が中心となり各種連携施策を推進する富山広域連携中枢都市圏が取り組んでいる具体的な事業を視察し、広域的な圏域での各種施策について調査し、参考にするため

・所感

連携中枢都市宣言書は、都市圏形成にあたり、富山市が圏域全体の活性化と発展に向けて積極的に役割を果たしていく意思を示すものということであり、強いリーダーシップを取るということが明確に示されており、具体的に何を連携しているということが書かれている。本市も全庁的に市として宣言を出すような形で大々的にやっていくということにより、本当の意味での連携というものができてくるのではないかと感じる。

そして公共交通については、市町村の垣根を越えて連携している印象がある。特に LRT や路面電車は電車そのものが観光名所の名物になっており、単なる移動手段ではなく様々な活用方法があり、地域の中で上手く機能している印象がある。また、自動車は移動手段として悪いのではなく、LRT や路面電車という他の選択肢もあることにより、ライフスタイルを見直し、歩いて暮らせる街を実現しているという部分で、考え方の柔軟性

を持つことの重要性を感じた。

さらに、比較的規模が大きい富山市がリーダーシップを取ってソフト面で福祉の事業を率先して実施しており、他の市町村に様々なソフト事業を提供していることが上手く軌道に乗っているという印象を受けた。特に産後ケアについては全国で初の市営施設を作った実績があり、同時にこどもたちのケアのことも熱心にされており、発達障害の関係についても幅広く受け入れていた。広域で受け入れるということで、東毛地区の館林厚生病院を中心とした連携を図ることで、保護者の安心につながるのではないかと感じ、本市の参考になるものであった。